

■令和4年5月定例記者会見

日時：令和4年5月23日(月)午前11時～12時

場所：吹田市役所高層棟4階特別会議室

市からの発表案件に対する質疑応答要旨

吹田市広報課

記者の皆様からご質問をお受けしたいと思います。

記者

家庭生活に支援が必要な幅広い子育て世帯への家事・育児支援について、支援対象は約何世帯ぐらいを想定されているのかということと、支援を受けるために要保護世帯が申請しなくてはいけないのか、もしくは市からアプローチをして支援をするのか、最後3点目が支援を拒否するというのも想定されますが、そういった場合、どう対応するのか3点教えてください。

吹田市担当者

まず、件数についてなんですけれども、今回予算につきましては、事業は10月からの実施を考えており、半年間で68世帯分の予算を計上しております。これは、支援対象として挙げています4項目で想定されることから算出した件数です。2点目の質問に関して、支援を必要としている家庭に適切な支援を届けることが1番課題であると考えております。要保護世帯等につきましては、今の時点ですでに我々の方で把握をしていて、こういったサービスの対象になるではなかろうかと思われる家庭等があります。事業開始したからといって一気に申請が挙がってくるというのではなくて、まずは我々から、制度利用を勧めていかないといけないのではないかと考えています。そういった中で、当然、拒否される家庭も出てくると思います。対象となるからいきなり制度を使ってくださいということで利用開始を決定するというよりは、その決定に至るまでの過程です。やはり学校との連携というのは非常に重要になってくるかと思っています。

記者

広く申請を受けるといったことではないということでしょうか。

吹田市担当者

促しをして、申請をいただくという形です。

記者

今日の案件で全体的に、未然防止とか早期発見というのは本当にすごく重要なことなのだろうということは理解できるのですが、実効性を与えるには限界があるのではないかなと思っています。かなりこと細かくチェックしないと早期発見というふうな未然防止に結局繋がらないのではないかなと思っています。

後藤市長

これは総力を挙げて取り組まなければいけないことだと思います。マスコミの皆さんの力も大きいです。市民もそうです。地域もそうですし、行政はその一部です。これをすれば解決しますとは思っていません。少しでもサポートして、次のチャレンジに繋がりたいという試行錯誤です。

春藤副市長

1つの切り口として、吹田市の場合はほとんど核家族化していますので、妊娠して出産されたら親に来てもらってちょっと手伝ってもらおうと思っても、それができないという状況がありますので、その面での妊産婦サポートということです。それ以外にも、一時預かりであるとか、待機所の話とかもあります。全般的な子育て施策をやっていって、子育ての負担軽減、経済的負担、身体的負担、精神的負担を軽くしていって、みんなでサポートしていかないとはいけません。行政としてすべてができるわけじゃないけれど、地域力が弱っていますので、それを補完する意味で、行政がある程度手を差し伸べないと駄目なんじゃないかなと思っています。

記者

妊産婦サポートクーポン事業について、2万円というのは、サービスを一回利用したら使い切ってしまう印象がありますがいかがでしょうか。

吹田市担当者

2万円の金額設定について、1か月間、週1回2時間利用すると見込んでいるのですけれども、1時間あたりの金額が約3千円。2時間利用しましたら6千円ということで、そこをベースとしまして、今回2万円の金額を挙げたという形になります。

記者

2万円というのが少ないかなというイメージがあるし、本当にちょっとしたサポートにしかないなというイメージがあったのと、もう一つは、2万円程度のサポートで本当に育児負担が軽減するのかわというところを疑問に思いました。

春藤副市長

ひとまず2年間この内容でやってみて、2年経って、ニーズなどを把握して、組み立て直すのだったら組み立て直したいと思っているので、対象範囲や、利用用途とか金額など、どの程度のニーズがあって、どうしたら使いやすいとか、走りながら考えてないと分からないのですけれど、今までできてないところに手を差し伸べようというチャレンジだと思っています。

記者

ICTを利用した児童・生徒のメンタルヘルス把握によるいじめ・不登校等の予防的支援は文科省からの委託事業ということなのですが、これは全国で他にもやっているところがあるのですか。それとも、吹田市だけで実施されるのですか。

吹田市担当者

この取り組みにつきましては、吹田市独自の吹田市のみで実施するものとなります。

記者

こういう取り組みというのは全国的にどれぐらい珍しいものなのですか。

吹田市担当者

GIGA スクール構想によって、1人1台端末で健康観察を行なっているというのは聞いています。ただ、そこに科学の知見を入れて、日々観察しているものがどのように子供のメンタルヘルスと関係しているのかというところまで分析して取り組んでいるところは今の段階では、把握しておりません。吹田市が日本で初めてかなと考えております。

記者

この市内10校程度というのは小学校ですか。小中両方ですか。

吹田市担当者

小学校中学校合わせて10校程度でさせていただこうと思っております。

記者

市立小中ですか。

吹田市担当者

市立です。

記者

すみません、細かいところなのですが、10校程度の全児童生徒になるのですか。

吹田市担当者

10校程度の小学校1年生から中学校3年生、全児童生徒対象としております。

記者

具体的にどうやって健康観察、メンタルヘルスを測るのですか。このお腹が痛いとかいうのは直接的かつ身体的な特徴じゃないですか。

吹田市担当者

今回、連携をさせていただく公益社団法人子供の発達科学研究所と取り組みを進めているところなのですけれども、具体的にその子供が身体の不調を訴える。実は、そことメンタルヘルスの状態には相関が

あるというような研究結果がありまして、日々子供たちが、お腹が痛い、頭が痛い、なかなか朝起きられなかった、そのような項目を日々回答していくことの蓄積によって、心の状態も心配じゃないかというふうな形で、先生が一覧等で把握できるような形で考えております。

記者

直接的な質問項目、例えば子供なりが入力する項目というのはそういう頭が痛いとお腹が痛いというところを入力していくのですか。

吹田市担当者

日々、先生が口頭などで行っている健康観察の項目と、メンタルヘルスの関係がしっかりありますという科学的な根拠に基づいて、取り組みを進めていこうと思っております。

記者

それは先生が判断していくんですか。

吹田市担当者

データによって、ちょっとこの子は赤信号、黄色信号で少し気になるよというふうなカタチで、先生が見られるツールといいますか、指標を作成しまして、それをもとに、先生がまず声かけを行っていくほか、学校に入っておりますスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの専門家の意見を、校内等で共有しながら、その子に対してどういうアプローチをとっていかうかと考えております。これまでは先生が朝、子供の体調などの様子を見ながら、ちょっと気になるなという時に声掛けていたのですが、そこに一つの科学的な視点を入れることで、よりの確に子供の困り感等に寄り添えるような支援につなげていけたらなと思っております。

記者

何か今日朝起きてやる気が出ないとか、そういう何かメンタル的な質問というのが入ってくるのですか。

吹田市担当者

そうですね。今日の気分がみたいな形の項目は、入れることも今検討はしているのですが、主になかなかその部分は個人の主観だとか、子供が本当のこと言うかどうかというところもあるので、やはり身体的な症状からも読み取れないかというふうな形で考えております。

記者

これからどんどんデータを蓄積していったその相関関係というのを分析していった、今後データ蓄積して判定の改善を図りつつやっていくという感じになるのですか。

吹田市担当者

項目につきましては、今年度実施させていただく中で、適宜修正等も入る可能性はあると考えております。

すので、実際現場の子供たちや先生の反応を見ながら、よりよい項目選定等を行っていきたいと思っています。

記者

その端末はタブレットですか。

吹田市担当者

はい。タブレットです。

記者

全員に行き渡っていますか。

吹田市担当者

はい。行き渡っています。

記者

何月から始まりますか。

吹田市担当者

実際子供たちがとり始めるのは9月からを想定しております。

吹田市広報課

お時間過ぎましたので終了させていただきます。